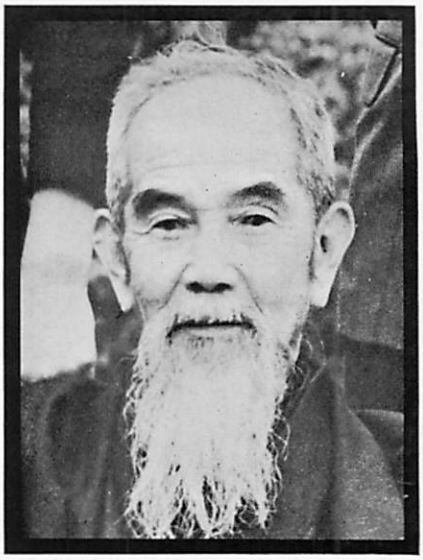
故 名誉員 工学博士 安藝杏一氏 略歴



わが国土木界の最長老として，多くの後輩の敬愛を一身に集めておられた安芸杏一博士が，去る8月22日，88才の天寿をもって逝去せられたことは，斯界のため誠に哀惜の念にたえないところである。

博士は，明治29年7月帝国大学工科大学土木科を卒業，ただちに内務省第3区土木監督署に勤務，その後土木局調査課，横浜土木出張所長を経て，昭和4年3月退官後は，昭和7年7月財団法人日本港湾協会監事に就任，爾来昭和18年7月同協会理事，昭和22年9月同協会顧問の要職を歴任されている。この間，在官中においては，当時問題視されていた新潟港築港の可能性について，10数年間の調査研究の結果，築港工事は容易でないが，適当な維持費を投ずれば3000t級の船舶の出入接岸はあえて困難ではないとの確信を得，築港工事の促進をはかり，今日の新潟港発展の基礎を築いた。

その後内務省土木局調査課に転じ，わが国重要港湾の調査および修築計画に従事するかたわら，陸軍参謀本部の命により北樺太アレキサンドロウスク港を視察，将来の改善および拡張に関し意見書を提出，国家の要請にこたえた。また内務省横浜土木出張所長として在勤中，大正12年9月1日の大震災で壊滅し，その復旧が危ぶまれていた横浜港の復旧工事を担当，所員を督励して昼夜兼行これが復旧に精励努力，その結果，工事は所期の成果をあげ，同13年度内に岸壁は全部竣工をみるにいたったもので，わが国の代表的重要港湾である横浜港修築史上における博士の功積はきわめて大なるものがある。また，当時清水港修築工事，狩野川改修工事をも指揮監督した。退官後においては，日本港湾協会の要職にあって地方公共団体の委嘱による新潟県直江津港を始めとし40数港の港湾調査ならびに修築計画の樹立にたずさわり，わが国港湾の発展振興のため多大の貢献をなした。さらに同協会の委嘱により昭和12年6月南部九州および沖縄諸港の港湾調査を行ない，港湾施設の改善と利用増進をはかり，同地方の産業開発に資するところきわめて大なるものがあった。また昭和12年8月，当時のシャム国政府はバンコック港修築について世界各国より，この設計を募集した。博士は協会の調査委員会の一員として，本修築計画策定に参画，その結果，提出された日本の設計は詮衡により，第1等の栄冠を獲得，わが国港湾技術の優秀性は国際的に高く評価されるにいたった。ついで昭和12年10月当時の国策遂行に寄する目的をもって，協会に支那港湾調査会が組織されるや，同調査会の一員として渡支，北支方面はもちろん中支方面の諸港湾の調査に尽力した。そのほか，博士は徳島市の要請により徳島港第1期修築計画を策定，徳島港発展のために寄与するとともに，南満洲鉄道の委嘱により多獅島，大連，旅順，営口，河北，壺盧島，秦皇島，吟爾浜，佳木斯，羅津，雄基，清津，等の諸港を調査，改良計画の意見書を提出，また陸軍省軍務局の委嘱を受け，北支における新港計画設定のため，現地を調査，意見書を提出するなど，その足跡は，あまねく国の内外におよび，その業績はきわめて広範囲にわたるものである。

上述のとおり博士は，その豊富な経験と，卓越した技能を活用して後進の指導育成をはかるとともに，終始一貫，わが国港湾の振興発展はもちろんのこと，海外港湾の振興発展のためにも精魂を傾けて尽力されてきたものであり，その功績はきわめて顕著なものがある。

また学協会においては大正11年以降前述のように，日本港湾協会を指導され，昭和27年10月，同協会より港湾功労者として表彰状を授与せられ，河川協会よりは昭和25年名誉会員に推挙せられている。

土木学会にあっては大正8年から10年まで会誌編集委員長として，土木工学の進歩啓発に尽力せられ，大正9年10年には常議員（理事）として学会の運営にあたられた。昭和25年5月の通常総会においては，多年にわたる功績顕著なるをもって土木学会名誉員に推挙せられた。

博士は戦災にあわれたにもかかわらず横浜には長く住まわれ，昭和23年6月，横浜開港記念日に横浜市から横浜港湾功労者として感謝状と記念品を贈られたのをはじめ，同29年11月には運輸大臣より交通文化賞規定により表彰状を，32年3月には横浜市より横浜文化賞を授与された。そして36年9月1日付をもって勲二等に叙し瑞宝章を授けられた。

博士はきわめて謹厳実直な方で，工事の施工にあたっては非常に慎重に行なわれたが，新しい機械や工法の採用には決断力が強かった。博士の趣味はよく読書に親しみ能書家であった。酒もたしなみながら飲まれ，謡などもやられ円満な家庭人であった。御長男は先ほどエカフエ事務局の治水水利開発局長に就任された安芸皎一博士であり，お孫さんの中にも土木技術者がおられる。謹んで御冥福を御祈り申上げる次第である。

【土木学会】